

野村政之

私は 2014 年、ソウルでの APP キャンプ以来、3 年ぶりの参加だった。前回参加してアジアのプロデューサーたちと個人的に関係がくれたことは自分自身の海外への姿勢を変える画期となったので、この間不参加だったことを残念に思っていた。

とはいえ正直に言うと、メルボルンに着くまで、自分の仕事の領域や「アジアのプラットフォーム」である APP にオーストラリアがどんな意味合いをもつのか、イメージを結べておらず、どこことなくモチベーションに曖昧さを残していた。結果的には思った以上に得るものが多い 1 週間となった。

オーストラリアは、イギリスや欧米「ではない」西洋文化の国である、その一方で、先住民との共生共存の課題を抱えている。アイデンティティ、そして国際的あるいは地政学的な自らの位置を探り続けてきたオーストラリアの歩みから、アジアの中の日本、あるいはアイヌや沖縄との関係など、自分が普段見過ごしている点が繰り返し意識された。

そして何より印象深かったのは、先住民の芸術活動とその考え方である。とりわけ期間中何人かの発言で聞いた「文化に参加する」(participate in culture) から「文化を通して形づくる」(shape through culture) へ、といったフレーズは、私に深い示唆を与えた。舞台の上に作品を創り、公演という場をプロデュースし、客席に観客の参加を得るというようなあり方(だけ)で、果たして私たちの仕事は事足りているのか。既存の芸術・文化のあり方を保持することで、却って現代社会の中でのポテンシャルを低く見積もっているのではないか。日頃抱いているそんな疑問に対して、取り組む上でのヒントを与えてくれる。

このフレーズの元を辿ると、先住民がもつ世界認識にまで遡ることができる。「すべての事は今も創られている。プロセスの上にある」・・・こうした見方は、過去から現在・未来へと線形の時間を仮定して、前後を分け、始点と終点を定め、逆算したり結果から評価を加えたりするような見方～私たちの仕事の前提～に根本から問いを投げかけるものである。

また今回、韓国の APP メンバー 1 人が「ブラック・テント」運動中で不参加となったこともあり、特別に検閲について議論するセッションが行われた。国・地域を越えてそれぞれの経験と観測を基に情報を交換し、議論した。国際的なプラットフォームの重要性と意義を改めて実感するに十分なものだった。

APP キャンプが含まれていたフェスティバル「ASIA TOPA」の「XO STATE」という企画で、東アジア～東南アジアの様々な地域のパフォーマンスと出逢うことができたのも収穫だった。細かく見れば各地域の伝統文化や現在の社会、西洋との距離感をそれぞれのあり方で反映しているともいえるだろうが、俯瞰してみればほとんどバラバラだった。何を面白がり何をつまらないとみるか、そしてそれは何故か、ぐるぐる迷いが止まらなかった。面白い。アジアという括り自体まだまだぜんぜんわからない、とちょっと怖くも感じたことを、よく覚えておきたい

と思う。